J-STAGE NEWS
J-STAGEニュース
No. 42
電子ジャーナルの最新情報をおとどけするJ-STAGE機関紙
Online ISSN:2434-4311
2020年1月24日発行
国立研究開発法人
科学技術振興機構

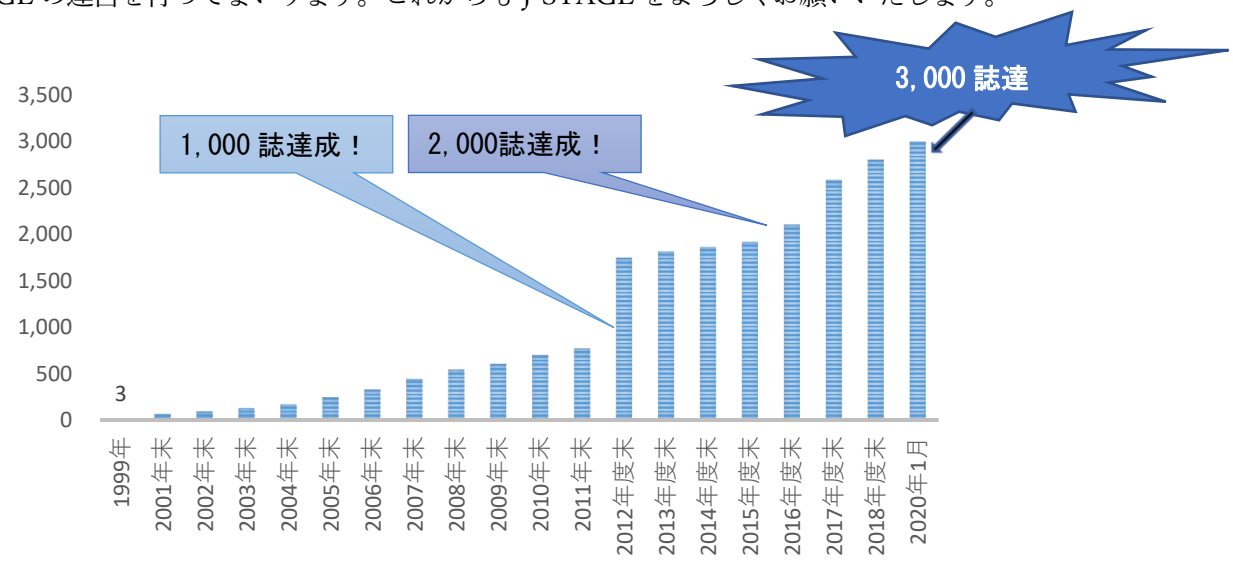
本号の記事

◆ J-STAGE 公開 3,000 誌達成！
◆「J-STAGE Data」の運用に向けて
◆【シリーズ学会訪問】～国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター～
◆【J-STAGE 利用者インタビュー】～東京都立中央図書館～
◆ J-STAGE ジャーナルコンサルティング ～第 2 回ミニセミナー報告～
◆【来訪者紹介】
◆ J-STAGE からのお知らせ
◆ 編集後記

J-STAGE 公開 3,000 誌達成！

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.42.1

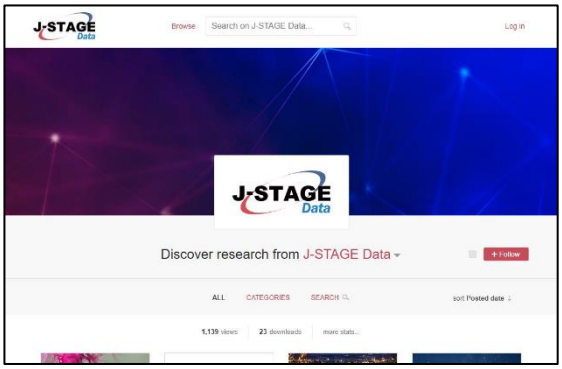
1999（平成 11）年、わずか 3 誌の公開から運用を開始した J-STAGE ですが、年々公開誌数を増やし、2020 年 1 月 7 日に公開 3,000 誌を達成しました。今後も、益々多くの利用機関にご利用いただき、科学情報発信に寄与できるよう、J-STAGE の運営を行ってまいります。これからも J-STAGE をよろしくお願いいたします。



J-STAGE 公開誌数推移

「J-STAGE Data」 の運用に向けて

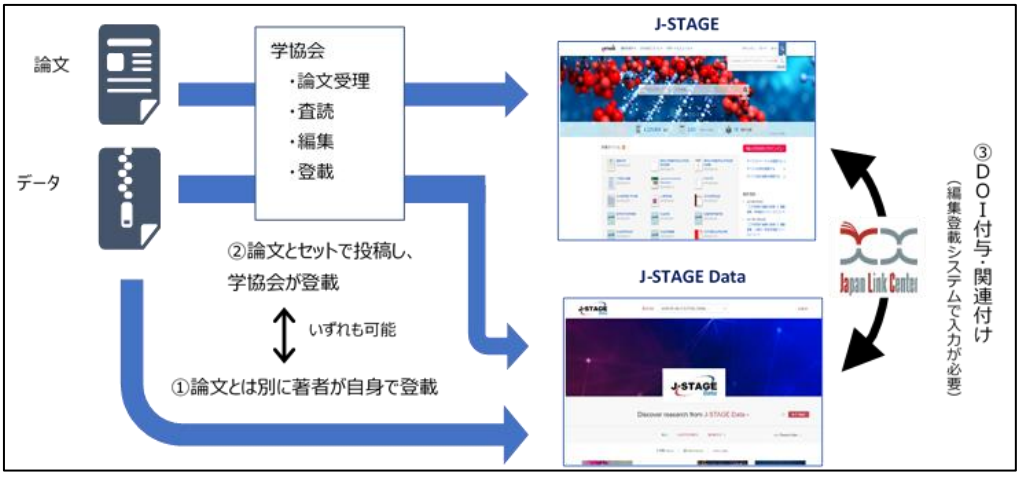
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.42.2



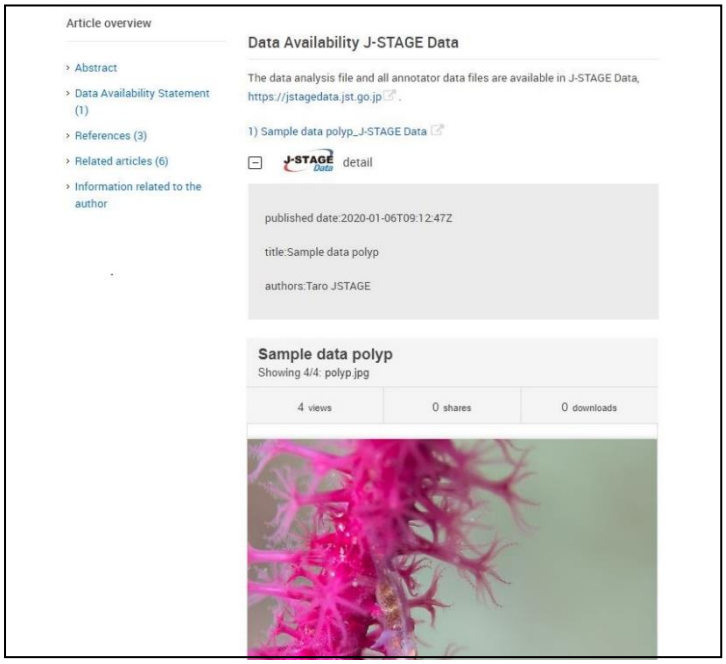
J-STAGE Data トップ画面
（開発段階のサンプル画面）

近年、国内では多くの大学や研究資金助成機関などにおいて、研究成果の根拠となる研究データ（エビデンスデータ）の公開を奨励あるいは義務化する方針が策定されています。こうした動向を受けて、J-STAGE では、登載論文の関連データを公開する研究データ共有プラットフォーム「J-STAGE Data」の構築を進めてきました。現在、今年度内の試行運用に向けて準備中です。

J-STAGE Data は、海外で広く利用されている研究データリポジトリ「figshare(フィグシェア)」のシステムを利用しています。J-STAGE Data という大きなリポジトリの中に登載誌の個別リポジトリを作り（リポジトリの構築には申し込みが必要です）、著者や発行機関が投稿論文に関連する研究データを登載する仕組みになっています。



J-STAGE Data フロー（開発段階）



J-STAGE 書誌画面における関連データの表示例
（開発段階のサンプル画面）

J-STAGE Data に登載された研究データには DOI が付与され、すべてオープンアクセスで公開されます。また、研究データを J-STAGE 上の論文に紐付けて示すこともできます。J-STAGE 編集登載システムで当該論文に関連する研究データのメタデータ（タイトル、著者、DOI、Data Availability Statement※など）を入力すると、J-STAGE 書誌画面にデータの概要とプレビューが表示されます（左図）。

今後 J-STAGE Data が、多くの J-STAGE 登載誌に紐付く研究データ共有プラットフォームとして活用されることで、研究データの利活用促進や、研究過程の透明性の保証につながることが期待されます。

※Data Availability Statement：データの公開されている場所や利用方法などを明記した文章

【シリーズ学会訪問】
～国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター～

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.42.3

国際農研　本所（つくば市）

本号の「学会訪問」では、国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター（国際農研）における J-STAGE の活用方法と「Japan Agricultural Research Quarterly: JARQ」誌の方針等について、企画連携部情報広報室の林 賢紀 様にお話を伺いました。国際農研は、1970（昭和 45）年に農林省熱帯農業研究センターとして発足し、1993（平成 5）年に現センターに改組、2001（平成 13）年の独立行政法人への移行を経て、現在は以下の取り組みを実施しています。

1）開発途上地域における持続的な資源・環境管理技術の開発
2）熱帯等の不良環境における農産物の安定生産技術の開発
3）開発途上地域の地域在来資源を活用した高付加価値化技術の開発
4）国際的な農林水産業に関する動向把握のための情報の収集、分析及び提供

国際農研は、日本の農林水産業研究に関する成果やその動向を海外、とりわけ開発途上国に紹介することを目的として JARQ 誌を発行しています。創刊は 1966（昭和 41）年で現在、年 4 回発行し国内の大学・研究所などの機関に加え、約 100 か国の研究・普及機関などにも配布されています。Vol.35（2001）以降は、J-STAGE で公開しています。（https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jarq/-char/ja）

林 賢紀 氏

●林さまの貴センターにおけるお立場と学術出版業界との関わりについてお聞かせください。

私は、1993 年から農林水産省農林水産技術会議事務局（農林水産研究情報総合センター）に勤務し、全文情報を公開する AGROLib（農林水産文献ライブラリ：試験研究機関研究報告、公立試験研究機関研究報告、大学研究報告、学・協会誌など、掲載の許諾を得られた全文情報を提供）などの運営に携わり、J-STAGE や JST の JOIS（現、JDreamⅢ）との連携にも関っていました。その後、2014 年からは国際農研の図書館の運営と Web サイト関連の業務に従事しています。この間、SPARC Japan（国立情報学研究所 学術情報流通推進委員会）のセミナー企画ワーキンググループにも関わってきました。

●貴センターでの J-STAGE の利用状況、認知度について教えてください。

国際農研の利用者は、日本熱帯農業学会など自分が所属している学会誌が掲載されているプラットフォームとして J-STAGE を認識しているようです。私自身は文献複写の依頼を受けた際、書誌事項の確認などの際によく利用します。日本の学会誌であれば、まずは J-STAGE から検索しています。Google Scholar で検索している人が多いと聞きますが、国内の特に和文誌を探すのであれば J-STAGE のトップから探す方が効率的と思います。また、最近は Google 等で見つけた論文がいわゆるハゲタカジャーナルであるなど、調査依頼を受けた場合などに信頼できるサイトの方が安全・安心、確実に文献を提供できるという面もあります。

●閲覧利用者から見て J-STAGE はいかがでしょうか。他のシステムと比べて不満な点、改善してほしいことはありますか。

最近（2017 年）のリニューアルでだいぶ使いやすくなったと思います。他システムと比べても使い勝手に特に不満な点はありません。検索機能について欲を言えばキリがないですし、現状で問題はないと思っています。あえて言えば、メンテナンスでシステムが止まり、使いたい時に使えないことがあるので、頻度や実施の時間帯について検討いただければと思います。

●最近の図書館を巡る情勢、海外に移っていくジャーナルに対してはいかがお考えでしょうか。

日本全体のコンソーシアムがなかなかできない。それが、日本でまとまって発言できる機会が少ない原因の一つではないかと思います。SPARC Japan に携わってそう感じました。J-STAGE 登載ジャーナルでも海外サイトに移っていく例があるようですが、国際農研のジャーナルに対しても海外出版社から引き合いが来ることがあります。しかしながら、現在 J-STAGE から移る予定はありません。海外の人に見てもらえる研究成果（論文）をちゃんと日本から出版していくこと、発信していくことが大事で、J-STAGE にはその点でも期待しています。

●J-STAGE 利用（登載・公開）機関として J-STAGE に対するご要望、アドバイスをお願いします。

データリポジトリに関して国の機関である JST に期待しています。投稿者からも研究データの保存・共有に関して要望が出ています。ゲノムデータなどを対象と考えていますが、データ容量や情報セキュリティーの確保などの課題のほか、国際農研は規模も小さく、自前でシステムを抱えることは困難なので J-STAGE で対応していただけると嬉しいです。特に、海外の研究者等とデータをシェアしたいと考えていますので、ある程度お金がかかるとしても利用を検討したいところです。

●最後に、貴センターおよび JARQ 誌の今後の方針（抱負）についてお願いします。

今後は、オープンアクセス（OA）について取り組んでいきたいと考えています。OA とフリーアクセスの違いが内部でもなかなか理解されておらず、そのあたりから広めて行く必要があります。また、CC ライセンスの適用や理解の増進も課題と考えています。JST には、引き続き J-STAGE セミナーの開催などで情報の提供や支援をお願いできれば幸いです。

●ありがとうございました。ご指摘の点についてはご期待に添えるよう改善に向けて努めて参ります。

【J-STAGE 利用者インタビュー】～東京都立中央図書館～

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.42.4

J-STAGE 一般利用者の声を紹介するシリーズ、本号では、東京都立中央図書館 管理部企画経営課の飯島由美子様とサービス部情報サービス課の森口歩様に、J-STAGE の利用状況、図書館を巡る情勢、今後の抱負等についてお話を伺いました。

●都立中央図書館について（沿革、特徴など）教えてください。

都立中央図書館 正門

当館は、1973（昭和 48）年に開館し、途中で旧都立日比谷図書館（2009（平成 21）年に千代田区へ移管）の蔵書を引き継いだ資料を加え、国内の公立図書館では最大級の 210 万冊以上の資料を所蔵しております。そのうち新しい図書を中心に約 36 万冊を自由に閲覧できます。個人への貸し出しは行っていません。調べものに役立つ江戸・東京関連資料、全国の地方紙、外国語図書などを豊富に取り揃えています。江戸時代後期から明治時代中期の和書、漢籍、浮世絵の他、国指定重要文化財「江戸城造営関係資料（甲良家伝来）」など貴重な資料も所蔵しています。都立図書館は当館の他に 2017 年 1 月に立川市から西国分寺市に移転オープンした都立多摩図書館があります。こちらは雑誌と児童青少年を中心としたサービスを行う図書館です。

現在、中央図書館では、2020 年東京オリンピック・パラリンピック開催にあわせて、東京の歴史関連の書籍・資料のコーナーを設けております。また、日本について書かれた洋書も揃え、海外からの利用者が東京のみならず日本の文化に興味をもってもらえるように工夫をしています。

私（森口）は司書として、主に来館者や電話・メールでのレファレンス対応をしています。以前、資料の収集部門で契約・管理に携わっていたこともあり、JDream はよく利用していました。

東京や日本の文化に関連したコーナー

●貴図書館における学術論文の検索・利用状況はいかがでしょうか。

当館で最も利用されるデータベース群は、新聞や一般の雑誌記事に関するもので、次に法令等が多いのですが、学術論文の検索・利用もそれに次いで需要があります。当館では JDreamⅢなどを含め 30 種類を超えるオンラインデータベースを用意しておりますが、科学技術系記事の全文閲覧の要望がある利用者には積極的に J-STAGE を紹介しております。

J-STAGE は大学などのアカデミックな場にいる方はご存じのようですが、一般の方にはあまり馴染みがないようで、人文・社会分野の情報検索を行うときは、J-STAGE より CiNii や図書も同時に検索できる NDL ONLINE を使う場合が多いようです。しかしながら、図書館で所蔵していない資料を J-STAGE で見つけることが度々あり、また、CiNii では全文が見られない記事を J-STAGE では閲覧できるため、利用者の方にご案内する際に役立っています。当館職員からは、J-STAGE の検索・閲覧範囲が拡大し、Nii-ELS に収録されていた人文・社会系の記事の一部が J-STAGE に統合され利用しやすくなったとの意見がありました。今後はますます利用が増えるのではないでしょうか。

●最近の図書館を巡る情勢（購読料の高騰など）、日本の学術出版についてはどのようにお考えでしょうか。

当館は大学図書館と異なり、電子ジャーナルを購入していないので購読料の高騰については緊急の課題とはなっていません。

図書館にとって収蔵は大きな問題で、例えば、必要ではあるけれど利用頻度がそれほど高くはない「紀要」などの資料は電子ジャーナルでの閲覧が有効で、インターネットを介した学術文献の流通が促進されることを大変ありがたく感じています。

●J-STAGE へ期待すること、アドバイス等はございますか。

フリーで全文閲覧ができる論文をどんどん増やしてほしいと思います。また、規模の小さな大学・短大等が組織改編や廃校となった場合でも、記事の継続的な存続が J-STAGE で確保されることを望みます。機能的には特に要望はありません。

飯島氏(左)と森口氏

●最後に今後の方針や抱負をお聞かせください。

「東京の未来を拓く力となる　知の集積・発信　都立図書館」を使命に、広域的・総合的情報拠点として、新しい時代に見合ったサービスをさらに充実してまいりたいと思います。

●貴重な情報とご意見をありがとうございました。今後とも J-STAGE をよろしくお願いいたします。

J-STAGE ジャーナルコンサルティング ～第 2 回ミニセミナー報告～

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.42.5

J-STAGE ジャーナルコンサルティング
～第 2 回ミニセミナー～

J-STAGE 登載誌の質の向上に向けたジャーナルコンサルティングの取り組みの一環として、2019 年度第 2 回目の J-STAGE ジャーナルコンサルティングミニセミナーを 11 月 19 日に開催し、J-STAGE 登載誌 8 ジャーナル 14 名が参加しました。

本セミナー では、8 月の第 1 回開催時と同じく、ジャーナルが抱えている現状の理解と、質の向上のための基盤構築をテーマとし、オープンアクセス（OA）、クリエイティブ・コモンズ（CC）ライセンス、DOAJ（Directory of Open Access Journals）について紹介しました。また、ジャーナルの現状評価の実施方法について、ジャーナルの投稿規程、Aims & Scope、Web サイトなどジャーナルの基盤となる要素の評価方法と、その結果を踏まえた上で取り組むべき課題の選定方法を紹介しました。今回参加したジャーナルに対する現状評価は、海外コンサルティング会社および JST が行い、結果を 2020 年 1 月末頃に各ジャーナルへ提供します 。

参加者からは、「学会にとって有益な情報だった」「学会で取り組むべき課題が整理できた」等の感想をいただきました。また、CC ライセンスの導入や DOAJ への申請に今後取り組みたいといった声も多く挙がり、改めて OA に対する国内学協会の関心が高まってきている印象を受けました。

来年度 のジャーナルコンサルティングおよびミニセミナーに関する詳細は、2020 年 3 月開催の J-STAGE セミナーにてご案内いたします。

参考 ：J-STAGE ジャーナルコンサルティング～第 1 回ミニセミナー報告～
https://doi.org/10.34344/jstagenews.2019.special.6

【来訪者紹介】

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.42.6

J-STAGE では、出版社、プラットフォーマー、テクノロジープロバイダといった、学術コミュニケーションに関係する海外機関から来訪者をお迎えし、意見交換等を行っています。本欄では、随時来訪者を紹介いたします。

◆2019 年 10 月 24 日

International Association of STM Publishers（国際 STM 出版社協会）と会員出版社

Mr. Jiro Iwasaki（Senior Marketing Manager, Wiley. 一番右）
Dr. Hiromitsu Urakami（RSC Japan Manager, Royal Society of Chemistry（RSC）. 右から 2 人目）
Dr. Michael Mabe（CEO, STM. 右から 5 人目）
Dr. Anders Karlsson（VP, Elsevier. 右から 6 人目）
Ms. Barbara Kalumenos（Director of Public Affairs, STM. 左から 3 人目）

◆2019 年 12 月 5 日

The Institution of Engineering and Technology（IET, 英国工学技術学会）

Mr. Giles Grant（Executive Director, Director of Knowledge Services and Solutions. 左から 4 人目）
Mr. Andrew Altmann（Commercial Director of Knowledge Services and Solutions. 左から 3 人目）
Mr. Eric Na（Regional Director, Asia Pacific. 一番右）

J-STAGE からのお知らせ

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.42.7

＜刊行物に「巻」「号」がついていない場合の登載方法＞

J-STAGE で公開されている刊行物で、「0 巻」と誤表示されているものが散見されたため、本号では「巻」あるいは「号」がついていない刊行物における、記事の登載方法の注意点についてお知らせします。

●「号」がない場合

通常逐次刊行物には、「巻」(vol)と「号」(no)がついており、例えば年に 2 回発行する刊行物であれば、それぞれを○○巻 1 号、○○巻 2 号とします。しかし、年に 1 回の発行物には、「号」のつかないケースがあり、その場合、J-STAGE で記事を登載する際には「号」をつける作業が不要となります（「J-STAGE 操作マニュアル」より）。なお、「Web 登載サービス」を利用している場合は、**「号」の入力欄に「0」を入力してください。**詳しくはこちらをご覧ください。

●「巻」がない場合

刊行物によっては「巻」の概念がなく「号」のみで発行している場合がありますが、**J-STAGE では「巻」の情報が必須となります。そのため「巻」がない場合は、「号」を「巻」として登載してください。**詳しくはこちらをご覧ください。

●誤って登載してしまった場合

誤った方法で登載して J-STAGE 上で「0 巻」の表示が出てしまった場合は、J-STAGE センターまでご連絡ください。

J-STAGE センター：center@jstage.jst.go.jp

＜J-STAGE 推奨基準の改定について＞

「編集基準」と「登載・公開基準」からなる J-STAGE 推奨基準は、平成 20 年に初版を公開しました。初版から 10 年が経過し、学術情報の流通情勢も変化してきたことから、この度大幅な改定を行います。下記に改定・追加項目の一部を紹介します。

「編集基準」：

・CC ライセンス表示について

・オープンアクセスについて

「登載・公開基準」：

・二次出版、翻訳版等の公開について

・さまざまな版（著者原稿版、査読済版、出版版）の公開について

・エンバーゴおよび認証機能利用時の注意事項について

なお、改定後の推奨基準案について、J-STAGE の HP 上で意見招請を実施します。利用機関のみなさまからのご意見やコメントをお願いします（実施については J-STAGE 上でご案内いたします）

https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_opinion_offer.pdf

編集後記

●J-STAGE20 周年、3,000 誌公開を記念して、J-STAGE20 年表冊子を作成しました。年表を眺めていると、この 20 年間のいろいろな出来事が思い起こされ感無量となるのは私だけでしょうか。年表は 2 月中旬に HP でも公開する予定です。是非、ご覧ください。次の 20 年も J-STAGE をよろしくお願いいたします。(Y.M)

●令和が始まった！…と思いきや、もう令和 2 年…。J-STAGE Data 試行運用の開始、推奨基準改訂、J-STAGE20 周年記念シンポジウムなど、令和 2 年も JST の情報基盤事業部は大忙しです。J-STAGE ニュースを読んでいただきまして、誠にありがとうございました。今年も J-STAGE をどうぞよろしくお願いいたします。(K.O)

J-STAGE ニュース No. 42　2020 年 1 月 24 日発行

編集　：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）
情報基盤事業部 研究成果情報グループ

発行人：情報基盤事業部長　小賀坂康志
〒102-8666 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ
電話　：03-5214-8837(ダイヤルイン)
E-MAIL：contact@jstage.jst.go.jp

© 2020 Japan Science and Technology Agency